

「今までありがとう」

やっとの思い出仕事を終え、駆けつけた私にそう言うと、親戚や家族に看取られながら彼女は静かに息を引き取りました。親戚の方から、「毎週訪ねてきてくれていた人ってあなただったのですね。いつも喜んでいましたよ。数時間前から意識がなかったのに、最期にあなたにお礼を言いたくて来るのを待っていたのじゃないでしょうか。」と言われ、私は涙が止まりませんでした。

彼女と私は病院で知り合い、子供の話で意気都合し、相談に乗ってもらったりアドバイスを受けたという仲でした。やがて、癌が骨にまで転移し通院することが困難となり、まだまだ在宅で死を迎えることが少なかった8年前、彼女は「住み慣れた家で過ごしたい」と言い、往診と訪問看護を利用しながらの在宅死を決断しました。

そうして私は毎週末自宅を訪ね、1～2時間話をして帰ることを続けました。彼女は、「主人や子どもが側にいて、友達や妹もよく来てくれるから、病院より家で過ごすほうがやっぱりいい」心身共に穏やかに過ごしていました。

やがて、病状が進み食事もほとんどとれず、横になって話すことしかできなくなってきたため、私が来ることが負担になっているのではないかと思い、ご主人に尋ねてみると、「あなたが来ることを家内は毎週楽しみに待っているのです、都合がつかなら来てほしい」と言ってもらえ、他には何もできないけれど私と話をすることで、少しでも楽しい時間を過ごしていると感じてもらえるならと思い、最期まで行く決心をしました。

私は、病気になっても最期まで住み慣れた家で自分らしく生きる大切さを彼女から教えてもらいました。人生の終末のときをどこで、どのように過ごすかという決定は必ずしも容易なことではありません。特に在宅で死を迎えるということは、本人の希望だけでなく家族も希望し、最期まで介護を続けるという覚悟がなければ成り立ちません。病院のようにナースコールを押せば医師や看護師がすぐ来てくれるのではなく、24時間家族が神経を張りつめて看護しなければなりません。その中で私たち看護師ができることは、少しでも本人や家族の不安を取り除き、一人ではないのだと思ってもらえることではないかと考えます。

看護とは、その人の持っている「生きる力」を最大限に発揮できるよう、そして安らかな死を迎えられるように援助していくことであり、また、家族も後悔することなく精一杯のことができたと思えるよう、本人や家族の気持ちに寄り添うことだと思います。そして最期に「いい人生だった」と思ってもらえるように・・・